

防災ラジオドラマ作りを通じたリスクガバナンス創発の試み

An Experimental Study to Create Risk Governance at Local Level by Recording a Radio Drama for Natural Disaster.

○坪川博彰*, 長坂俊成*, 田口仁*, 須永洋平*, 臼田裕一郎*

Hiroaki TSUBOKAWA, Toshinari NAGASAKA, Hitoshi TAGUCHI, Yohei SUNAGA, Yuichiro USUDA

Abstract. The research project team of the Disaster Risk Information Platform of NIED (National Research Institute for Earth Science and Disaster Prevention) proposes a new concept called the disaster risk governance as a cooperative activity of all subjects independently to deal with severe disasters in the modern society. This paper reports the practical study undertaken for local disaster risk governance in Fujisawa city, Kanagawa prefecture. Residents and volunteers have created a radio drama based on the result of the scenario workshop. We consider this is a very effective solution as a measure against future natural disasters.

Key Words: Radio Drama, Scenario, Workshop, Risk Governance

1. 研究の目的

防災科学技術研究所の災害リスク情報プラットフォーム研究プロジェクトでは、災害リスクシナリオワークショップの実践を通じて、多様な主体が係り合いながら具体的な地域の防災課題を議論し住民自ら解決する手法を検討できるプログラムを試行してきた。本研究はその手法をさらに発展させ、住民、NPO、行政、地元企業、各種団体など多様な主体がかかわる地域の災害リスクガバナンスを創発させる効果を持つ防災ラジオドラマの作成を提案するものである。現在、地震および水害リスクシナリオに基づくラジオドラマの制作を神奈川県藤沢市や新潟県長岡市山古志地区などで進めており、今後全国各地の地域主体による防災への取り組みに展開してゆく予定である。これにより災害リスクへの社会的対抗策の地域主体による実践が可能になると筆者らは考えている。

2. リスクコミュニケーションの媒体としての防災ドラマの役割と効果

災害時に起こるさまざまな事態をすべて予測す

るのは不可能といってもよい。行政は地域の防災計画を策定する段階で一般的に「被害想定」と呼ばれる工学的手法を利用したシミュレーションを行い、一定の蓋然性を持つ災害被害の想定作業を行うのが通例となっている。そこでは地域に懸念される各種災害について、死者や負傷者などの人的被害、建物の全壊や半壊あるいは全焼や流失などの物的被害、さらには電気・ガス・水道などの生活支障被害等を予測している。これらの情報は指標としては有益であるが、災害で生じる事態を一面で語っているにすぎない。災害が具体的に市民一人一人の生活にどのような影響を及ぼすのかという点については、行政資料は語ってくれない。

被害想定を下敷きにして、一人一人の状況に見合った被害を予測し評価した上で、有効な対策を考えなければ防災は空回りしてしまう。そこで被害想定に描かれた被害予測結果に基づき、住民個々あるいは地域社会に起こりうる状況をわかりやすく描く手法が必要になる。筆者らはこれをシナリオとよび、専門家でなくても自らの地域に起こりうる事態を住民主体によるワークショップで

* 独立行政法人 防災科学技術研究所 (National Research Institute for Earth Science and Disaster Prevention)

検討する手法を提案した（坪川ら，2008）。

ワークショップでは多様な意見が出されたが，大事なことは起こりうる事態を地域住民の多くが認識し，共通の理解を作ることである．そこでワークショップで抽出されたシナリオに基づいて，事態をドラマ化する手法を考えた．ドラマ化されたことで，防災に特別な知識や意識がなくても事態の理解が容易になることが期待される．

3. 防災ドラマの制作過程

以下，ラジオドラマを制作する過程について順を追って整理する．

3-1 基本シナリオの作成

ドラマの脚本を作成するための基礎資料はシナリオ作成型防災ワークショップを通じて得られた参加住民の発言記録である．本稿では議論をわかりやすくするためにワークショップで住民が発現した記録そのものを「シナリオ」，それをドラマ放送用に脚色編集したものを「脚本」と呼ぶことにする．現在，神奈川県藤沢市や新潟県長岡市山古志地区を始め，全国各地でシナリオ型のワークショップを実施しているが，本稿では藤沢市で行った2種類のシナリオワークショップを中心に紹介する．最初のもは藤沢市立鶴沼小学校区を対象とした地震時の避難所におけるシナリオである．このワークショップについては坪川ら（2008）に詳しい経緯が述べられているが，災害時に避難所となる中学校で関係者が直面する様々な課題を，議論しながら乗り越えてゆく過程を取り上げたものである．8つの課題があり，それぞれが独立した場面として設定されている（表1）。

2つ目は藤沢市の鶴沼海岸5丁目で，単一町内会の自主防災組織が直面する水害を対象としたドラマである．この地域では町内会による自主防災組織が十分に機能しておらず，活動方針も役割も不確定な状態であった．そこでワークショップを通じてどのような役割が必要になるかを検討し，その結果を自主防災活動に結び付けようという狙いがある．最初に地域が直面するリスクの種類と程度に関して議論したが，地域を縦貫する河川（引地川）の氾濫や集中豪雨に伴う内水氾濫による水害が喫緊の課題として採用されることとなった．但し水害の場合は地震と異なり，災害前の準備段階，災害時の緊急対応段階，災害後の後始末の段階の3つの段階ごとに議論された（表2）。

表1 鶴沼中学校区防災連絡会で議論されドラマ化された避難所の8シーン

第1回 4月2日放送	避難所施設の安全確認と開設
第2回 4月16日放送	避難者名簿の作成をどうするか
第3回 5月7日放送	避難所に来られない人の存在がわかったら
第4回 5月21日放送	近所の飲食店からの食料の差し入れ
第5回 6月4日放送	外国人被災者との関係を考える
第6回 6月18日放送	新住民と旧住民との関係を考える
第7回 7月2日放送	災害ボランティアが地域に受け入れられるには
第8回 7月18日	介護の必要な家族を抱えた被災者への地域からの支援

表2 鶴沼海岸5丁目の水害事態進行表(タイムライン)

時期	状況	出来事
事前準備	災害発生前（数日前から数時間前まで）	気象庁から大雨の発生に関する予測が発表される．注意報が発表され，場合によっては警報に変わる．市の防災広報車が地域に回る．防災無線スピーカーから注意が呼びかけられる．
	災害発生直前	町内会で自主防災関係者が集合する．側溝や集水マスに詰まりがないか点検が行われる．
事に対応	低い地域で道路に冠水箇所が始める	冠水センサーが作動→あめリスクナウ（防災科学技術研究所のリアルタイム水害警報システム）を通じて関係者にメールが配信される．（今後整備されると想定した場合）
		町内会の連絡網を通じて，浸水に関する注意が連絡される．

時期	状況	出来事
	浸水が徐々に広がり深さを増してゆく	土嚢積みが始まる。 要援護者の安否確認・救助に向かう。
	玄関あたりまで水が達する	貴重品や家財を2階に上げる。 一人暮らしや支援を必要とする人たちには地域でサポートする。
	1階床下に水が入り始める	状況によっては避難する。
	床上に水が達する	2階に避難する（屋外に避難するのをあきらめて）。 水が引くまで（2階で）耐える。
事後処理	被害量の把握	地域の被害を把握し、町内で情報を共有する。
	後片付け	水害で被災した住宅や庭の後片づけを地域で支援する。
	罹災証明発行手続きに関する住民支援	保険金請求や見舞金受給のために必要な、罹災証明を受け取る処理を地域で支援する。

3-2 脚本化

ワークショップで議論された記録を素材として脚本が制作されることになるが、この段階では地域に生活するアマチュアの脚本家の協力を仰いだ。今回は地域の防災 NPO である藤沢災害救援ボランティアネットワークの協力によりアマチュア劇団を主宰する人物の協力を得ることができた。脚本化に際してはシナリオ WS で議論されたすべての資料だけでなく、WS のビデオ記録も議論の雰囲気伝えるために活用された。

ドラマの脚本に加工する場合には、いくつかの基本的構成要素(ドラマツルギー)が必要である。現在その部分を体系化したいと考えているが、これまでの試行事例から見えてきたものを列挙すると、場づくりのために欠かせないもの(必須なもの)としては、①災害の予兆、②地域の社会的背景、③組織構造、④災害の発生、⑤不測の事態、⑥事態の展開、⑦事態の収束、⑧教訓、⑨反省、

⑩今後の展望などが必要になる。一方状況を理解しやすくさせ、聞き手の理解を促進させるものとしては、①意見の対立、②原則論者の登場、③知恵者の登場、④老練、⑤思いやり、⑥ユーモア、⑦悲劇などがとりいれているのが望ましいと考えられた。これらについては今後、防災ドラマの作成手法として一般化したマニュアルを作成したいと考えている。

3-3 声優の編成

ワークショップ参加者を中心に、ラジオドラマに出演する声優を募集した。基本的にワークショップに参加した地元住民の方々をお願いしたが、人数が足りない場合には、藤沢災害救援ボランティアネットワークのメンバーがサポートをした。ドラマ用の脚本ではワークショップに参加していない若い世代も必要になった。地震災害を対処とした鶴沼中学校でのドラマでは、全体の状況をモノログで語る女子高校生が登場するが、これは地元の高校生に協力してもらった。水害を対象とした鶴沼海岸5丁目のドラマでは、中学生や小学生の声も必要になるが、これは住民の家族のご協力を得た。

3-4 練習・収録・放送

一般住民参加型のドラマ収録であることから、十分な練習時間はとれない。脚本が確定して関係者に配布した後は、1回か2回の読み合わせで、即本番、収録という段取りで進めた。決してプロの声優のような演技は期待できないが、素朴な演技はかえって聞くものに臨場感を与えている部分もあると思われた。効果音、テレビ放送のアナウンス、状況説明のナレーションなどは、コミュニティ放送局が追加して編集した。

3-5 コメント

ドラマの脚本段階で関係者に見てもらい、事実関係に誤りがないか、ドラマには描かれていないが重要な事項はないかなどの観点からコメントを採録したのもこのドラマ作りの特徴である。藤沢市の防災担当部署の方々には、行政としてのコメントを、避難所となる学校の関係者、ボランティアや、地域の各種事業者などからも有益なコメントをいただき、それをそのままドラマ後のコメントとして採録した。

4. ドラマから見えてくるもの

防災ラジオドラマは地域の多様な主体による目に見える形での協働作業の一形態である。地域住民が主体であることは確かであるが、脚本化のためには地域固有の人材としてアマチュアの脚本家の協力も必要であるし、作成された脚本については行政を中心とした防災担当者のコメントも必要になる。またシナリオ内に表現された地域固有の防災資源という視点に立てば、民間事業者やボランティアなども関係者になる。防災専門家としての研究機関の研究者も当然関係者に含まれる。このように一つの災害をめぐる多様な主体がドラマというわかりやすい表現形式を利用して係り合うことが可能になっている（図1）。

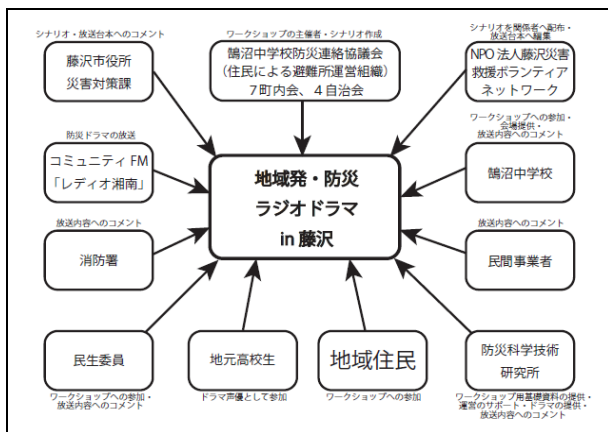


図1 地域の多様な主体が係り合う防災ラジオドラマのガバナンス

5. まとめ

災害経験のある地域とない地域との防災に対する意識差は驚くほど大きい。一度の深刻な被災体験は被災者のその後の人生のあり方や、ものの見方を変えてしまうこともしばしば語られている。われわれは被災体験の全くない人たちでも、自分たちが直面するであろう危機に対して、その理解を容易にし、効果的に対策を進めることができるツールが必要であると考えている。防災ラジオドラマはそのための第1歩にすぎない。まずは戦うべき相手（災害リスク）を知り、自分のもつ対抗力（資源）を十分にわきまえることが必要であり、その具体的理解形態がシナリオなのである。現代社会の複雑さ、多様性の増大は、原理原則だけに従った対応策では限界があることを示唆している。防災ラジオドラマが目指す協働の形態はその限界

を超えることをも目指しているのである。

謝辞

藤沢市の防災関連部署の担当者、藤沢災害救援ボランティアネットワークの方々、レディオ湘南のスタッフの方々、そしてドラマ作りに熱心に取り組んでくれた市民の方々に深く御礼申し上げます。

文献

- 1) 坪川博彰ほか (2008) : 災害リスクシナリオを用いて避難所運営を理解する試み—災害リスクガバナンス構造の再編を目指したリスクコミュニケーションに関する研究—, 地域安全学会論文集 No.10.
- 2) 防災科学技術研究所 防災システム研究センター 災害リスク情報プラットフォーム研究プロジェクトホームページ(<http://bosai-drip.jp/>)
- 3) 防災科学技術研究所 防災システム研究センター 災害リスク情報プラットフォーム研究プロジェクト (2009) : 「地域発・防災ドラマを作りますませんか」